

子育てサポートにおける地域が担う役割の検討

—子育てに関するソーシャル・サポート・ネットワークの実態分析から—

(代表) 黒川 杏実 (人間社会学域地域創造学類地域プランニングコース 3年)
河上 紘栄 (人間社会学域地域創造学類地域プランニングコース 3年)

指導教員

眞鍋 知子 (人間社会研究域人間科学系 准教授)

研究概要

1. 背景と研究目的

現代社会は、核家族やひとり親家族の増加など、家族のあり方が多様化している。また、プライバシーを重視する傾向や個を尊重する考え方が強まった。近年多くの地域では、地域コミュニティの希薄化が指摘されており、昔のような近所づきあいがなくなりつつある。このように周囲とのつながりの薄い状況のなかで子育てする親は、育児ノイローゼや育児放棄、幼児虐待など、育児に関わる諸問題を抱えている。

育児ノイローゼや育児放棄、幼児虐待など、育児に関わる諸問題を未然に防ぐのが「育児ネットワーク」を通じた「ソーシャル・サポート」である。ここでいうソーシャル・サポートとは、育児をする母親を取り巻く人や団体から受ける援助のことである。そこで、今回の調査では親族と地域コミュニティという2つの軸を用いて、子育てをする母親の育児ネットワークが、「親族が近くにいるか遠くにいるか」と、「住んでいる地域の地域コミュニティが希薄か密接か」によって規定されているのかどうかを調査し、育児ネットワークの実態を明らかにする。

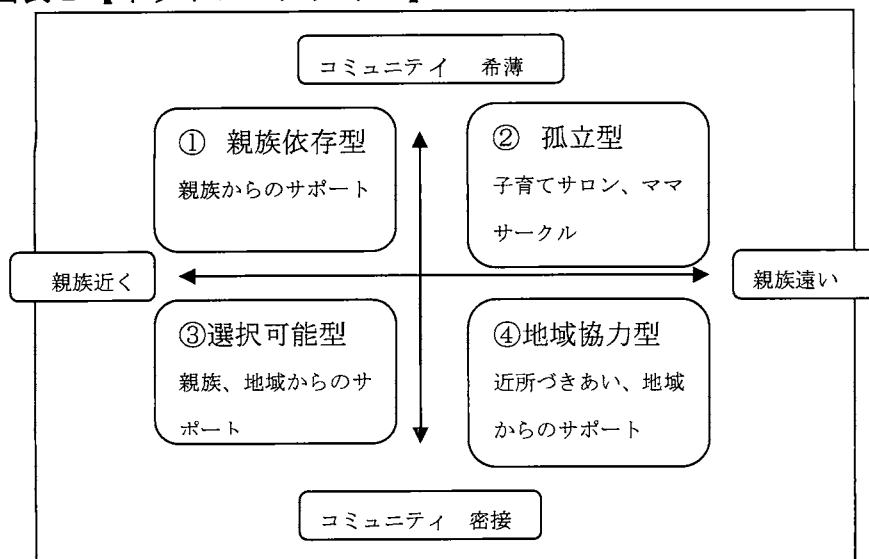
とりわけ地域コミュニティが希薄化していると言われている現代において、子育てに関するサポートを地域のネットワークから得ることは可能であるかどうかについて検討したい。

核家族化、少子高齢化が進む現代社会において、子育てサポートに関しての地域の役割を検討することで、現在問題になっている幼児虐待や、子育てをしている親の孤独感といった問題の解決へ繋がることが期待される。

2. 研究方法

以下のように、2つの軸（コミュニティ軸と親族軸）を用いて、子育てをする母親を、4つのネットワークタイプ（図表1）に分類する。そして、「ネットワークタイプによって、得られるサポートの主体が異なる」という理論仮説を、子育てサロンでの聞き取り調査をもとに、証明していく。

図表1 【ネットワークタイプ】



ネットワークタイプからの仮説

- ① 地域コミュニティが希薄で、親族と近く又は一緒に暮らしている母親は、親族からのサポートを受けやすい（親族依存型）
- ② 地域コミュニティが希薄で、親族とも離れて暮らしている母親は、外部の育児サービスを利用する（孤立型）
- ③ 地域コミュニティがしっかり形成されていて、親族と近く又は一緒に暮らしている母親は、地域からも親族からもサポートを受ける（選択可能型）
- ④ 地域コミュニティがしっかり形成されていて、親族と離れて暮らしている母親は、地域からの育児サポートを受けやすい（地域協力型）

今回は、金沢市富樫町にある「教育プラザ富樫」内の子育てサロン利用者を対象に、聞き取り調査を行った。

3. 研究成果と考察

教育プラザ富樫（金沢市）の聞き取り調査の結果から、子育て中の母親たちの現状としては子育てサロンの利用者は親からはサポートを受けていないという人が多いことが分かった。これは結婚により、夫の実家近くに引っ越して来たために頼りづらい状況にあることや転勤によって近くに親族がいない地域で子育てをすることとなったり、自分の親が近くにいても、専業主婦又は育児休暇を取得中のためサポートを求めたりしないためである。コミュニティが希薄な地域に居住している人がほとんどであったので、子育てに関して地域からのサポートを受ける例はなかった。またコミュニティが密接である、もしくは希薄であるかに関わらず、プライバシーの問題等で積極的に地域に関わろうとせず、知り合いのいない場所を求めて遠くから子育てサロンを利用しに来る人も見られた。子育てサロンには、地域からも親族からもサポートを受けていない、もしくは受けようとしなない孤立型の人が多かった。

以上の調査の分析から、地域コミュニティが希薄な地域で、親族とも遠く離れて暮らす孤立型の母親は子育てサロンなどの外部機関のサービスを受けていることが分かった。私たちの仮説であるネットワークタイプにおいては親族が近くにいるかどうかということが、子育て中の母親のサポートに大きく影響を与えていると考えていた。しかし、実際に教育プラザ富樫で行った調査の結果からは親族が近くに住んでいるにも関わらず、親族のサポートを受けようとしなない母親が多くいることが分かり、親族が近くにいるかどうかということは、子育て中の母親のサポートにはあまり関係がないように思われた。したがって、仮説①は成り立たないと言える。

私たちは、育児サポートに対するネットワークタイプをコミュニティが密接か希薄か、また親族が近くにいるか、遠くにいるかで4タイプに分類したが、現在では、その前提となるコミュニティが密接である地域そのものが少なく、あるいは密接であっても積極的に地域にサポートを求めようとしなない母親が見られた。

また孤立型の中にも外部からのサポートを積極的に受けようとするタイプと、完全に一人、もしくは家族だけで子育てをしようとする孤立孤独型の2タイプが見られることが調査を通じて分かった。親族が近くにいたり、地域のコミュニティが密接であったりとしても、積極的にそれらのサポートを受けようとする母親は少ないように子育てサロンでの調査では感じた。つまりネットワークタイプが異なっても、私たちが想定したようにタイプ別に異なったサポートを得ているようには見受けられなかった。それよりもむしろ母親たちは自分にあったサポートを少ない選択肢の中から消去法的に選んでいるといえる。

したがって、「ネットワークタイプが異なれば、得られるサポートの主体が異なる」という理論仮説は、立証には不十分な点があり、ネットワークタイプが異なれば、得られるサポートの選択肢は増えるが最終的にサポートを選択するのは母親個人であり、一概にネットワークタイプが異なるからといって得るサポートの種類が異なることはないことがいえ

る。

また、今回の調査では、コミュニティが密接で地域からの子育てサポートを得ている人は見受けられなかった。むしろ、地域からのサポートを求めている人が多かった。これは、地域との交流がないことが第一に挙げられる。

しかし、話を聞いてもらったり、アドバイスを受けてみたい、または人とのつながりを持ちたいという思いをもっているからこそ公の施設を利用し、同年代の母親たちと交流を持とうとしたり、施設にいるスタッフにアドバイスを求めたりしているのではないかと。そこで、地域コミュニティがそのような働きを持つことの必要性を感じた。

従来のような近所づきあいでは、プライバシーの問題や自分の生活に干渉されるのを嫌う風潮などから時代にそぐわなくなっている。また現代では情報が氾濫し、子育て雑誌やネットで見た情報に振り回され、自分の子育てを他と比較し自信を失ってしまう母親も多くいる。

そこで、近年新しい地域社会の中での「たまり場」や「居場所」として注目されているコミュニティカフェの可能性について検討した。主に高齢者が利用する「おっちゃん家」（羽咋市）での聞き取り調査や東京で行われたコミュニティカフェのシンポジウムに参加した。その中で、コミュニティカフェを運営している人は子育てをしている母親の快適な居場所づくりを第一に考えており、具体的なサポートをするというよりはむしろ息抜きやリラックスできる場を与えていることが分かった。これは、私たちが当初地域からの育児サポートとして想定していた子どもを預かってもらったり、子育てに関する相談に乗ってもらったりというサポートの担い手という関係ではなく、場所を提供しサポートが必要な時は相談に乗るなど子育て中の母親を見守るという役割に徹しているように感じた。またカフェという性質上、気軽に立ち寄ることができ、子育てサロンのように子育てをしている母親だけが利用するわけではないので、他年代の人と交流できるというところに、地域コミュニティ創出の可能性を感じた。

4. 結論

調査の結果明らかになったことは、ネットワークタイプによって受けられるサポートの主体は異なっているのではなく、サポートの受け手である母親が少ない選択肢の中から選んでいるということである。したがってコミュニティの密接さや親との距離によって、サポートの種類が規定されることはない。母親たちが求めていることと行政や地域が行っていること、近所の人とはみな同じ価値観を持っているという昔ながらの同質的な共同体のモデルは現代では通用せず、以前のような近所づきあいのままでは難しい。多様化した現代では、行政が全ての要望に応えるような働きを担うのは難しく、行政に任せっぱなしにはもはやできない。これからの時代は、お互いを干渉し過ぎない、価値観を押し付けない、それでいてそれぞれが役に立てるような場作りが大切になってくるのではないかと。

そこで今回の研究の中では、コミュニティカフェという、新しいコミュニティを形成するきっかけとなるものに可能性を見出した。コミュニティカフェは、地域とのつながりを創出する一つのツールである。これによって、地域コミュニティが希薄となっている現代において、子育てサポートを地域のネットワークから得ることが可能になるといえるのではないか。研究当初は地域から得られるサポートとして、子どもを預けたり、お下がりをもらったりということを想定していたが、調査を通じて、求められているのはそのようなことよりもむしろ、一人で子育てをすることの多い母親へのアドバイスや不安を取り除くことであることが分かった。コミュニティカフェは、そういった母親の心理面をサポートする役割を担っている。

コミュニティカフェは今現在ブームとなっているだけで、東京都では一時期たくさんあったもののすぐになくなって今では2軒ほどしか残っていないそうである。コミュニティカフェには、人材面でも、経営面でも不安なことはたくさんあり、まだ成功事例も少ないことから確立されたとはいえない。大切なのは、カフェという建物ではなく、その中で形成されていく人と人のつながりである。子育てサロンでの聞き取り調査やシンポジウムに参加してみて分かったことは、コミュニティカフェをはじめ、地域でのコミュニティ作りは、少子化・高齢化が進む日本において、可能性を秘めたものであるということである。地域でのコミュニティづくりは、今回調査したコミュニティカフェのように、自分の得意なことを活かして、誰かの役に立つことで生きがいとなったり、地域の担い手となる子どもを地域のみinnで育てることとなったり、ブームという一過性では終わってはいけない大切な役割を果たすものである。

今回の研究では、調査の対象者が少数であり、また調査地域も狭い範囲に限定されていたため、調査結果に偏りが見られた。今回の研究を踏まえて、これからは、石川県のみに限定せずもっと広範囲にわたって調査を実施することが望まれる。子育てをする母親のソーシャル・サポート・ネットワークの実態をより広範囲で把握することで、よりよい子育て環境がつけられ、少子化対策の一助にもなり得ると、私たちは考える。

参考文献

◆文献

- ・落合恵美子著『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989年12月
- ・WAC編『コミュニティカフェをつくろう！』学陽書房、2007年12月

◆論文

- ・原田昌幸「子育て女性の豊かな地域環境の創造～住宅近隣地域における育児期の女性の

コミュニケーション発生と場所特性～」日本建築学会学術講演梗概集（F）、2009年8月

- ・野口真弓、新川治子、多賀谷昭「育児をする母親のソーシャル・サポート・ネットワークの実態」日本赤十字広島看護大学紀要、2000年、1：49-58

◆インターネットサイト（閲覧 2010年6月～2011年1月）

- ・「金沢市教育プラザ富樫」

<http://www.togashi.ed.jp/>

- ・「社団法人 長寿社会文化協会（WAC）」

<http://www.wac.or.jp/>

- ・「NPO 法人 Mama's Café」

<http://www.mamascafe-plus.com/>

- ・「コミュニティレストラン・PIKO-POKO」

<http://www.pikopoko.com/>

◆参加フォーラム（日時 2011年1月15日、16日 場所 東京都港区）

「子育てコミュニティカフェフォーラム～子育てコミュニティカフェの可能性と広がり～」